
新羅 × セルティ 2月14日

菅原明智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新羅×セルティ 2月14日

【Nコード】

N4745R

【作者名】

菅原明智

【あらすじ】

いつもより上機嫌に見える新羅。気のせいだろうか？なんだかんだで、セルティは新羅の事を意識してしまう。

「セ、ル、ティ」

仕事を終え、シャワーを浴びていたら、どうやら新羅も帰ってきたらしい。……それにしても、異様に機嫌がいい。24にもなった大人の猫撫で声なんか出して、気味が悪い。

……ま、この男ならなにをやっても許せてしまっ、不思議ななにかを持っているが。

《おかえり》

とりあえず気付かないフリをして、シャワー室の曇りガラスにいつもの通りに書く。新羅もいつも通りに、呑気な声でたたいま〜と言った。それ以上はなにも言わず、パタパタとスリッパの音を響かせ居間に向かって行く。

……？ さっきの猫撫で声は気の所為か？

「あ、セルティ。上がったかい？」

新羅は椅子に座ったままコーヒーを啜り、私の方を向いた。特にいつもと変わらない。本格的に、気の所為みたいだ。

私が部屋に戻ろうと踵を返した時、腕をぐっと掴まれ、思わずよるめいてしまう。一体、なんだ！ 噛み付くように振り向くと、やはりと言うか……いつもの呑気な、へらつとした笑顔。

「僕もシャワー浴びてくるからさ、ここで待っててよ。今日は先に寝ちゃ駄目だからね」

《はぁ……？ 何故だ》

咄嗟に打ち込み、新羅の眼前に突き出す。私とした事が……なにをこんなに動揺している！？ ただの仕事の話に決まってるじゃないか！ そうだ、そうに決まっている。こいつは私をからかって遊ぶのが趣味なんだ！

「いーからいーから」

何故、仕事の話と言わないバカ新羅っ！

「んじゃ、行ってくるね」

《あっ、コラ新羅！》

パタパタ、スリッパの音が遠ざかっていく。それにつられて、私は思い切り脱力しその場に座り込んだ。

な……なんなんだ、一体。

シャワー室から音外れな鼻唄が聞こえていたかと思うと、すぐに水音が止んだ。ガチャツと扉が開かれ、生温い湯気と共に新羅が現れた。な、何故今日だけこんなに速い！？ いつもは長風呂なこの男が！

「やあセルティ、お待たせ」

タオルを頭から被り髪の毛を拭く新羅が、のんびりと言った。白衣とスーツは脱いで、今はラフな恰好だ。

「ん？ どうしたの、セルティ。直立不動で」

《なんでもない！ そんな事より、私を待たせていた理由はなんなんだ！》

キーボードを叩く指にも、つい力が入る。早く……早くなにかを言え新羅！ 首から上がないというのに、どうしてこうも苦しくなる

！？

「ああ……理由ね。うん、とっても楽しい事だよ」

ドキッ！ と、あるはずのない心臓が勢い良く跳ねた気がした。言われた事が理解できなくて、でもどこかで理解しているみたいで……私はない頭をぶんぶん振った。

「……せ、セルティ？」

《っなんでもないと言っている！ いいから言え！》

言わせていいのか、私！？ でも、でも……あう。ある訳ない、有り得ない！ だって20年も一緒に住んでたんだ、ここで間違いが起こるようなら、とつくの昔に起こってる！

……ん、いや。だって新羅は子供で……。でも、あれ？ 新羅はこんなに……大人っぽかったか？ こんなに、男らしく……それはだつて、あれから20年も経っているのだから、

今そつという事に目覚めても、おかしくない……？

「じゃあセルティ、ちよつとこつち来て」

ぐいつと引つ張られ、新羅の足が向かっているのは……寝室。これまでにない衝撃が、私の全身に走る。

《し、新羅……っ、どこへ行く！？》

「えっ、その部屋」

と指差すのは、やっぱり寝室じゃないかああ……！！ どうする、どうするんだ私！ もちろん私はお前が嫌いではないが、好きと言った訳でもないぞ！

「どうしたのセルティ、そんなに暴れて」

《ちよっ、ちよっと離せ！》

「ええ？……だーめ、ちゃんと僕が連れてくの」

こんな時に可愛さ発揮するなああ！ こういう所は昔と変わらないのに、身体と中身は変わってしまったと言っのか！？

じたばたと暴れる私を、新羅はものともせず引つ張っていく。こんなに力も強くなってしまっ……っ！

「はい到着」

私の腕を掴んでいない片手を、ぱーんと大袈裟に広げる新羅は、異様に楽しそうだ。さっきの猫撫で声は、やはり気の所為なんかではなかったんだ。

「さ、入って入って」

……私はもう、抵抗を諦めた。よく考えたら、嫌いじゃない……好きなんだ、私はこの男が。だから、もう身を委ねても、いいじゃないか。

中に入ると、シワ一つないシーツが敷かれたベッドがあつた。

「あ、ここから逃げないの」

《逃げたくもなるわ！ お前一体なにを考えている！？》

「え、なにって………っあー、いや違うよ！？ 別にやらしい事とか考えてないから！」

《うるさい！ 説得力がなさ過ぎるんだお前は……っ！》

「ちょ……セルティ、落ち着いて」

ぎゃあぎゃあやっている、新羅が信じられない程の力で私を引っ張った。ぐらり、と視界が揺れる。新羅の顔が、目の前に迫ってい

て。背中には、柔らかい感触があつて。……キーボードも打てない状況。

私は新羅に、押し倒されていた。

「……ッごめん！ 本当にそういうつもりじゃなかったんだ！」

《……………》

新羅が慌てて起き上がり、私と新羅の距離が離れてしまう。私は動けないまま、私を見下ろす新羅を見つめた。

「セルティ……本当にごめん。君がこういうの嫌がるって、わかっていたつもりだったのに……」

《違う、新羅……違うんだ、そうじゃない》

キーワードに打てなくても、伝わってほしい……伝わればいいのに、この想いだけは。しかし新羅は私の気持ちを汲み取ってはくれず、さらに離れていってしまった。私も仕方なく、上半身を起こす。

「ごめんね……」

《気にしなくていい。言っただろう、お前の事は嫌いじゃないって……………》

それより、ここへ呼んだ本当の理由はなんだ？と付け足して打ち込むと、新羅はぱあっと表情を明るくさせた。いくら身体や中身が大人になっても……私にとってはまだまだ可愛い子供だよ、新羅は。

「……セルティ、これ」

《なんだ？　これは》

「セルティにあげる。今日はバレンタイン……好きな子に、チョコをあげる日だからね」

そう言つて、新羅はチョコの入った箱を私に押し付けるようにして渡してきた。手の中のそれを見下ろし、新羅の想いをしっかりと受け取った。

ああ……新羅は、これを私に渡したかったんだ。

《………ありがとう》

「本当は、女の子から男の子にあげるものなんだけどね」

《そ、そうなのか！？　ごめん……知らなくて》

「おや？　セルティは、それを知ってたら僕にチョコをくれるつもりだったの？」

揚げ足を取った物言いに、私はキツと新羅を睨み付けた。この男には、まったく意味がないけれど。やっぱり悔しい。

新羅はここで、拳が飛んでくると思っているだろう。だがその期待、私がしっかりと外してやる。たまには、私がお前を困らせてやる。

《……当たり前だろう》

打ち込んだ文字を見せると、新羅が目を丸くした。予想通りの反応に喜びかけた時、新羅が口元を綻ばせた。

「……そっかぁ……嬉しい」

本気で嬉しそうにしているこの男を見て、こちらの目が丸くなってしまってるようだ。期待を裏切った微笑みに、やはりないはずの心臓がとくとくと高鳴る。

冗談だ、と言えなくなってしまった。……それ以前に、冗談ではないから余計に。

「ふふっ、セルティは可愛いなあ。大好きだよ」

こんな軽口にも、私は嬉しくなってしまう。いつもならば、『可愛くなんかないっ！』と言って一発殴る所なのに。なんだか今日は、手の中に収まっている小さな箱に、それらの怒りを封印されているかのようなのだ。

「……あ、そういえば。セルティは、なにか期待してくれてたのかな？」

《は？》

「僕にここ……寝室に連れて来られて。やらしい事、考えちゃった？」

につこり、憎たらしい程の可愛い笑顔で言うこいつは、馬鹿だ。図星な私は……もっと馬鹿だ。

「ふふ……なーんてね。セルティに限って、そんな事ある訳ないか、……っ！」

手元にあった枕を、その顔面に思い切り投げ付けてやる。ズルズルと枕が下がり出す前にさっさと立ち上がり、寝室の扉を乱暴に開ける。

「え……セルティ？　もしかして、図星だった？」

そんな声を背中に聞きながら、私は自室に向かう。

本当に馬鹿だ、あいつも私も。小さな箱を大切に抱え、私は廊下を歩いた。

（後書き）

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございます!!
少しでも愛が伝わってくればいいなと思います!
良ければ、どんな事でもいいので感想をお願いします!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4745r/>

新羅×セルティ 2月14日

2011年3月9日13時49分発行